白梅学園大学
短期大学図書館
小平市小川町 1-830
TEL042-346-5626

白梅学園大学・短期大学図書館報

花みづき

第 35 号／ 2021.4.1

大学図書館における学術機関リポジトリの設置

白梅学園大学・短期大学図書館　新館長
子ども学部 家族・地域支援学科　教授
森山　千賀子

学術機関リポジトリとは、「大学等の機関内における研究・教育活動の学術成果物を、電子情報として収集・蓄積・保存し、外部に公開するために設置するインターネット上のサーバ」で、デジタルアーカイブの一つです。デジタルアーカイブとは、出版物、文化財、歴史資料等のあらゆる知的財産をデジタル化し、インターネット上で電子情報として共有し利用できる仕組みです。その中を大別すると「研究成果のアーカイブ」と「所蔵資料のアーカイブ」に分けられ、学術機関リポジトリは前者になります[1)]。

国内では 2003 年に千葉大学の図書館が最初に始めました。以降年々と増え、国立情報学研究所の統計によると、2020 年 3 月現在の公開機関数は 853（構築中含む）、公開コンテンツ（内容物）の総数は 316 万件を超えています[2)]。つまりは、国内の数多くの大学図書館が、学術機関リポジトリを構築しているといえるでしょう。

白梅学園大学・白梅学園短期大学（以下、本学）の図書館では、2014 年の 2 月から試験公開を開始しました。本学の学術リポジトリ規程によると、学内発行の学術論文（紀要等）、学位論文、教育資料、その他委員会が認めた大学刊行物が登録対象になっています。本学図書館の HP にある「白梅における研究」がその対象の中心です。

こうした大学図書館による学術機関リポジトリの設置は、学術研究や大学教育において大きな変化をもたらしています。これまでは、学術的な専門誌、学会誌などに所収された論文が公式な学術情報として認められ、研究・教育活動においては、文献複写が必要でした。しかし近年では、電子媒体での学術情報も学術論文の引用文献として評価され、大学図書館の学術機関リポジトリにアクセスすれば、すぐに検索、入手することができます。また、各大学等の学術機関リポジトリに蓄積されたデータは、CiNii（サイニー）という国立情報学研究所が運営するデータベースに集められ、インターネット上で国内外のどこからでも検索することができます。その一方で、各大学等の研究機関では、学内の研究・教育活動を社会に公開するわけですから、説明責任やコンテンツの質保証が問われてきます。

デジタル時代といわれる今日、学術機関リポジトリの設置は、大学図書館を身近な存在に変えつつあります。しかし、自らが足を運んで、知的好奇心を駆り立てる知的財産との出会いを楽しむことも図書館の醍醐味です。デジタルとアナログを使い分けながら大学図書館を、どうぞご活用ください。

▶森山先生おすすめ図書
- 『13歳からの「いのちの授業」 ホスピス医が教える、どんな時でも「生きる支え」を見つけるヒント』小澤竹俊著，大和出版，2006年
- 『JR上野駅公園口』柳美里著，河出文庫，2017年
- 『希望の一滴～中村哲、アフガン最期の言葉』中村哲著，西日本新聞社，2020年

＜注＞
1）米澤誠（2010.3）「大学図書館におけるデジタルアーカイブ」『文化・学術機関におけるデジタルアーカイブ等の運営に関する調査研究』（報告書）第 1 章 第 4 節　大学図書館におけるデジタルアーカイブ / 米澤誠 | カレントアウェアネス・ポータル (ndl.go.jp)
2）学術機関リポジトリ構築連携支援事業　学術機関リポジトリ構築連携支援事業 (nii.ac.jp)（2021.01．25 閲覧）

Memories of libraries1

読者の誕生 / 図書館の未来

子ども学部　子ども学科　准教授
須川　公央

図書館には、実に様々な本が収蔵されている。その一冊一冊には、当然ながら書き手である作者が存在している。作者が存在しなければ、作品は生まれようがない。

では、作品と作者の関係をどう考えるか。かつて、構造主義哲学の徒 ロラン・バルトは、それを「作者の死」という言葉で表現した。作者は自らの作品に対する正当かつ唯一無二の解釈者なのだろうか。そう問うて、バルトは否と答える。書かれた瞬間から、作品は作者の手を離れる。つまり、作者は「死ぬ」。以降、解釈は読み手の自由な読解のうちに委ねられることになる。そう考えてみれば、図書館は作者の死が刻みこまれた無数の書物が死蔵された空間ということになるだろう。作者の死、それは同時に「読者の誕生」でもある。死んだ書物に新たな息吹を吹き込むのは読者の役目である。図書館は、死と誕生とが常に交錯し合う出会いの空間でもあるのだ。

図書館の想い出を振り返ってみると、真っ先に思い浮かぶのは、本郷の東京大学付属総合図書館である。正面玄関を入って、左手に進むと記念室と呼ばれる閲覧室がある。天井まで優に 7 メートルは超えるだろう室内前方の壁には、イギリス国王ジョージ 5 世が寄贈したとされる鹿の剥製が堂々と鎮座している。知の殿堂たる図書館の威風堂々とした佇まいである。図書館の地下は、書庫になっている。2015 年から始まった改修工事を経て、今は自動書庫となっているが、かつてはお目当ての本を探しに地下 4 階にまで及ぶ書庫を右往左往したものだ。迷路のような書庫をぐるぐると回りながら、ようやく探していた本の前にたどりつく。そして手に取る。もう長いこと開かれてないであろう頁を一枚一枚と捲ってみる。鼻を衝く独特な紙の匂いと手触り、そして遥か遠い昔に誰かが書き残したと思われるメモ書きの数々。

本、とりわけ古書には時空を超越した不思議な力がある。自分が探していた本であるのに、まるでその本が自分を待っていたかのような錯覚。そして、手に取るのを一瞬ためらわせるような独特な威光。それは、ドイツの文芸批評家ヴァルター・ベンヤミンが称したアウラ（オーラ）―― 時間と空間とが捩れた、どんなに近くにあってもなおかつ遠い、そのような遠さの一回的顕れなのかもしれない。

もちろん、こうした感覚は個人的な本に対するノスタルジックな想い入れであって、寂しいかな電子メディアの発達は、いずれ書物を駆逐していくことになるのだろう。声の文化から文字の文化へ、書物の専有時代から印刷術を契機とする大衆普及時代へ、そして誰もが作者になれるデジタルメディアの時代へ。

いま、まさに受難の時代にある図書館は、これからどう変貌を遂げていくのだろうか。

図書館ホームページの「利用状況照会」で借りている本の確認・予約ができます。

▶須川先生おすすめ図書

- 『物語の構造分析』ロラン・バルト，みすず書房，1979年
- 『開かれた作品』ウンベルト・エーコ，青土社，1984年
- 『複製技術時代の芸術作品』ヴァルター・ベンヤミン，晶文社，1999年
- 『声の文化と文字の文化』ウォルター・オング，藤原書店，1991年
- 『読むことの歴史』ロジェ・シャルティエ他，大修館書店，2000年
- 『グーテンベルクの銀河系』マーシャル・マクルーハン，みすず書房，1986年

Memories of libraries2

子ども時代と本、子どもたちと本

子ども学部長
子ども学部　発達臨床学科　教授
福丸　由佳

18 歳までを過ごした自宅から徒歩 5 分のところに、1 階が子どもの図書室、2 階が大人向けの図書室と勉強のスペースという、当時としてはリッチな区立図書館がありました。その中でとりわけ好きだったのが、明智探偵の活躍する 江戸川乱歩の少年探偵シリーズです。怪人二十面相、黄金仮面…ほぼ全作読みました。「早く寝なさい」という母の言葉に、布団にもぐり懐中電灯を照らして読んでいたら、怖くて夜一人でトイレに行けなくなったことも…。そんな児童期を過ごした後、中・高時代は少し背伸びをして、ドストエフスキーやレマルクなどの海外の文学に触れたり、大学時代は三浦綾子の『氷点』をはじめ、向田邦子、林真理子など女性作家の作品を多く手にとったりしたことを懐かしく思い出します。

本を通じたもう一つの大切な思い出は、自分の子育ての時代、子どもたちが小さい頃の夜寝る前のほっこりタイムです。読み終わるまで寝ない気満々！の彼らを相手に、3 冊までという約束で、ほぼ毎晩絵本に触れた日々でした（『みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん』を選んでくれた時は、さすがに 1 冊。声もかれて大人もよく眠れました）。

宵っ張りな子育てでしたが、今思うとかけがえのない時間でもありました。文章をつないで、こっそりショートカットしてもすぐにばれて、子どもを侮るなかれとも教えられました。何度読んでも飽きることなく一緒にページをめくった『もこもこもこ』『はらぺこあおむし』『どこへ　いってた？』『もりのなか』『さるのオズワルド』、そして自分でも読めるようになったけれど、時に読んでもらうのも好きだった『エルマーのぼうけん』『はじめてのキャンプ』…。

また、3 年間の在米生活の最初の数か月間、心細い日々を過ごす親子の支えの一つとなったのも、日本から持ってきた本や絵本だったことが思い出されます。成長を機に、子どもたちにはそれぞれお気に入りの 10 冊を選んで残して、と頼んだところ、「懐かしい～！」の連発で、結局ほとんどが我が家の本棚に並んでいます。

最近は時間がないと言い訳が増える一方ですが、なおさら仕事関係以外の本に触れる大切さも痛感しています。でも手に取る本は、やはり家族をテーマにしたものが多いでしょうか。たとえば同じ“父親、父子、父と家族”を扱っていても、遠藤周作の『父親』、向田邦子の『父の詫び状』、井上ひさしの『父と暮らせば』、重松清の『ビタミン F』や『幼な子われらに生まれ』など、それぞれ味のある父親に切なくなったり共感したり、時には反発を感じたり。また、時代や社会背景とともに描かれる家族のありように変化を感じる一方で、時を経ても変わらぬものに気づかされることも度々です。

手探りすること、これまでにない工夫が求められることも多い日々、あぁでもない、こうでもないと思いを巡らすことも増えている気がします。何とも言えない気持ちになったり、視野が広がりはっとさせられたり、これでもいいのかな、とようやく思えたり…試行錯誤の多い今を生きる私たちにとって、本はさりげなく背中を押してくれる大切な存在だと改めて感じるこの頃です。

最新おすすめDVDも視聴できます。

▶福丸先生おすすめ図書

- 『悼む人』天童荒太著，文藝春秋，2008 年
- 『幼な子われらに生まれ』重松清著，幻冬舎，1999 年
- 『羊と鋼の森』宮下奈都著，文藝春秋，2015 年
- 『夜と霧』ヴィクトル・フランクル著，霜山徳爾訳，みすず書房，1956 年
- 『ネガティブケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』帚木蓬生著，朝日新聞出版，2017 年
- 『ヒューマンエラーは裁けるか 安全で公正な文化を築くには』ヒューマン・デッカー著，芳賀繁監訳，2009 年

Memories of libraries3

ある日の白梅図書館ワクワク物語

図書館の入り口を入ると、すぐに新着本のコーナーで足を止めたい誘惑にかられる。しかしそこで足を止めると地下の奥にある本棚までなかなか辿り着けない。入ってきた勢いのままチラッと横目でガラスケースの中をチェックすると、本よりも自分のマスクの歪みの方が気になった。マスクと呼吸を整えて、その先の教員の著書コーナー[1]にご挨拶。「本日も、どうにか到着しました！」

カウンターの前を通り過ぎて、左に目をやるとおすすめ本コーナー。「いいよね、この本！」自分と同じ本を好きな人がいると嬉しくなる。勝手に誰かのおすすめに共感しながら閲覧席を確認。新書コーナー[2]の前には学生が数名、くつろいだ様子で本を開いている。さまざまな学問分野の専門家が自分の関心事についてわかりやすく教えてくれる新書は、電車の中で読むのにちょうど良い。家を出てから 2 時間 30 分、学生から少し離れた場所で音を立てないようにして椅子をひき、重たいバッグをそっと下ろす。ほっとしたいところだが、まずはあらかじめメモしておいた本を探し出す。

メモには「配架場所 11 ／分類記号 134.9」とある。閲覧席の先にある哲学エリア[3]には、本屋さんには売っていない本も多く並ぶ。自分よりずっと年上のその本をおそるおそるめくると、読みにくいフォントと狭い行間、古い言葉づかいに心が折れそうになる。はじめの頃は 1 行目から何のことやらさっぱりわからなかった。専門の辞書と解説本があればわかると思っていたのは大間違い。今だって本当はよくわからない。今回も最後まで読み切ることはないだろう。それでも本を閉じてワクワクしながらカウンターへ運ぶ。貸し出しの手続きの間、いつも授業に本をたくさん持って来てくれる先生の言葉を思い出していた。「自分の読みやすい本から読むといい」うん…。確かにその通りだ。

今日こそは地下の奥にある棚をじっくり見てみたい。地下への階段をワクワクしながら踏み出すと、自分の足音に驚いた！この階段は思った以上に音が響くのだ。あせる気持ちを抑えるように二歩三歩と静かに足を運ぶ。踊り場を過ぎるとゼミ生の絵本紹介コーナー[4]が目に飛び込んできて一気になごむ。本を紹介するのは人を紹介するのと似ている。誰かに紹介されると、親近感が高まり読んでみたい気持ちになるのだ。紹介された本たちの優しい配色に、心はどんどん落ち着いていく。このエリアは、保育士の私が安心していつまでも居られる場所。けれど今日は、絵本と反対のエリアへ向かう。

■ 主なデータベース ■（一部学外アクセス可）

＜日本語論文＞ CiNii Articles、雑誌記事索引集成データベース、医学中央雑誌、メディカルオンライン、日経 BP 記事検索サービス

＜外国語論文＞ PsycINFO、PsycARTICLES、Academic Search Elite、Child Development&Adolescent Studies

＜新聞＞朝日新聞　聞蔵、読売新聞　ヨミダス歴史館、毎日新聞　毎索

＜百科事典＞ジャパンナレッジ、ブリタニカオンライン

図書館ホームページの「データベース」より、オンラインで利用できます。

大学院　子ども学研究科　子ども学専攻
修士課程 2 年　小林　千里

いよいよ、未知の本棚が見えてきた。「配架場所 30 ／分類番号 471.3 ／植物生理学 生物工学」[5]「植物が思考している？どういうこと？」ワクワクしながらページをめくる。「面白い！早く読みたい！」未知の本棚には、これまで考えてもみなかった新しい発見があった！「カウンターへ急げ！」気づくとまもなく 6 時限目が始まる！階段を上り、カウンターへ。教員の著書コーナーに目をやり「先生、今日もギリギリになりそうです」とひとまず報告。

本との出会いは、人との出会いに似ている。人との出会いが難しくなった 2021 年春、図書館には出会いがたくさんある！よし、明日も本に出会いに行こう。

1　教員の著書コーナーからは、近藤幹生『保育の哲学』「保育にとって大切なことってなんだろう」という問いがこの本のテーマとなっている。男性保育者から園長を経験した著者の言葉は、一見あたり前のようで重い。質問者の問いに真っ正直に向き合おうとする姿勢は、研究室でのいつもの姿と重なる。私の保育の哲学が始まった一冊である。

2　新書エリアからは、山鳥重『「気づく」とはどういうことか』を紹介したい。保育者は、子どもの何気ない姿からいろいろなことに気づく。神経心理学者が神経学と心理学に基づいて「こころ」の不思議に迫っていくあたりは、ミステリーを読むようなドキドキ感がある。

3　哲学エリアからは、E. フッサール『現象学の理念』近代哲学の主客一致の難問である認識論に決着をつけた現象学の創始者の著書。自らの確信を徹底的に検証する大切さを教えてくれる。

4　絵本エリアからは、『すずちゃんののうみそ』（文：竹山美奈子　絵：三木葉苗　題字：三木咲良）一枚の絵がとても印象的だったことを作家の三木葉苗さんに伝えたところ、すずちゃんの保育園で実際にあった一瞬だということを教えてくれた。三木さんはその絵を描いている間、自閉症（ASD）のある妹さんにもあったかもしれない友達との時間を思い、涙が止まらなかったそうだ。一瞬を切り取った一枚の絵が、これほど多くのことを語るという驚きの一冊である。

5　植物生理学エリアからは、ステファノ・マンクーゾ『植物は「未来」を知っている 9 つの能力から芽生えるテクノロジー』。植物学者が、植物の記憶力や特殊な運動能力、擬態力やインターネットのような分散化能力について科学的な研究に基づいて教えてくれる。脳を持たない植物が、人間とは違う方法で自らの未来を切り拓いているなんて驚きである。地球は人間だけのものではないと当たり前のことに気づかせてくれる一冊。

私の薦めるこの１冊
『新版　根を育てる思想　―子どもが人間として生きていくために』久保田浩
（新読書社 2020 年）

この本は、元白梅学園短期大学保育科教授の久保田浩先生（1916 ～ 2010）が 1983（昭和 58）年に『根を育てる思想』（誠文堂新光社）として執筆され、発行されたものに若干の修正を加え新版として、2020（令和 2）年に発行されたものです。私が白梅学園短期大学保育科の専任教員として着任した当時、久保田先生は保育科の専任教員として在職中で、先生はご自身の著書を発刊される度に毎回毎回、私たち保育科の教員一人ひとりに著書をプレゼントしてもらっていました。旧版本は私が白梅に着任をする前に発行されていましたから、その本を読んだのは、確か私が白梅に着任後に白梅の図書館から借りて読んだという記憶があります。

久保田先生が執筆された多数の著書は現在、殆どが廃版になっており、昨年、この本が新版として発行された情報を聞き、私はすぐに購読をしました。内容としては、あえて一言で言うとすれば、久保田先生の保育思想の原点が書かれています。「まず、幼児教育の原点をみつめなおさなければならない。子どもたちが、いまおかれている状況をとらえ、その危機的状況を打開するするちからをもつ教育のあり方をさぐらなければならない。そしてその上にたって“生活”と“遊び”を軸にしながら、幼児教育のありようを明らかにする努力をしていくべきであろう。」と「はじめに」に書かれています。保育現場における子どもたちの“生活”と“遊び”を重要視し、その中での子どもたちの行動（状況）をまずはしっかりとウォッチング（観察）し、理解をしながら、保育を展開していくという原点は、現在の幼稚園教育要領、保育所保育指針等で言われている重要なポイントと重なっています。「子どもに何をするのか？」よりも、「今、子どもに何が起こっているのか？」がより重要であり、これが子ども理解の基本ということだと思います。

短期大学　保育科　教授
花原（はなばら）　幹夫

本文のⅡ探究の視点、６表現活動の中に「子どもたちが動きまわる。さわり、手に持つ。ときには口にいれなめてみる。まわりのものをたたいてみる。紙をやぶる。泥をかきまわす。ちょっとみると、何の意味もないことを、あきずにやる。（中略）こうした表現以前の姿を、私たちは、正しくとらえてるだろうか。」とあります。この文も「子どもの感性と表現」について、私が自身の専門分野として考えている原点と重なっています。

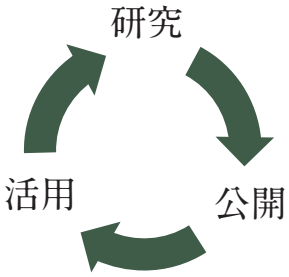
他にも文中の内容をいろいろとご紹介したいのですが、紙面の都合上割愛をさせて頂きます。是非ともこの本を読んでみてください。

各教員おすすめ図書は図書館に所蔵しています。ぜひご利用ください。

▶花原先生おすすめ図書

- 『きのうのつづき 環境にかける保育の日々』あんず幼稚園編集，宮原洋一写真，新評論，2012 年
- 『汐見稔幸 こども・保育・人間（Gakken 保育 Books）』汐見稔幸著，学研プラス，2018 年
- 『日本が誇る！ていねいな保育：0・1・2 歳児クラスの現場から（教育技術新幼児と保育 MOOK ブックレット・シリーズ）』大豆生田啓友・おおえだけいこ著，小学館，2019 年
- 『0,1,2 歳児保育　「あたりまえ」を見直したら保育はもっとよくなる！―足立区立園の保育の質が上がってきた理由（Gakken 保育 Books）』伊藤玲奈著，学研プラス，2018 年
- 『心を育てる保育環境：思いと環境をつなぐ保育の空間デザイン（教育技術新幼児と保育 MOOK）』佐藤将之著，小学館，2020 年

Memories of libraries5



（図書館×子ども学研究所共同）

古田足日　研究

調査のいま、これから

インタビューチーム

プロジェクトメンバー
子ども学部　子ども学科　教授　仲本　美央

古田足日氏のご自宅に所狭しと並べられていた蔵書が本学へ搬入される直前の2020年2月より、インタビューチームのプロジェクト活動はスタートした。未だ古田氏の文筆活動の空気感漂うご自宅にて、ご令室と生前同氏と交流があった5名の文壇の皆様にご協力いただきながら児童文学者、評論家、作家、教育者としての軌跡を辿っていった。インタビューは、各人によって語られた内容は深く幅広いものであり、古田氏と共に子どもの生活に良質な児童文学作品を生み出していくことに寄与していた様子が証言された。

古田氏がその生涯で生み出した作品を読めば、その時代の世相に生きる子どもを現然たる姿で捉えていたことは自明のことではある。さらに、これらの人々の証言によって、執筆活動中、どのように子どもへのまなざしを向けていたのかという事実が明らかになった。ここで、証言の一部を報告すると、古田氏は作品によっては、編集者や画家と共に保育現場などへ足を運び、取材からあらゆる子どもの姿を捉えながら執筆活動をしていたという。その現場で子どもたちと過ごし、声を聴き、会話をし、生活経験をすることによってさまざまなことを感じ取り、話し合っていた。

関係者の視座から捉える古田足日の子どもへのまなざし

『おしいれのぼうけん』をはじめとした作品に表現された子どもの内面の感情や次々と現れる子どもならではの出来事は、古田氏がまなざしを向けた先にある子どもたちの生きる姿であったに違いない。だからこそ、私たち読者は、登場人物である子どもたちと共にその世界を体験しているかのような感覚に誘われるのだろう。

現在、上記のインタビュー調査の一部を質的に分析し、結果をまとめている最中である。今後、その成果を関係分野の学会で発表したり論文を投稿したりなど取り組んでいく予定である。また、コロナ禍が落ち着いた頃、新たな関係者へのインタビューもスタートする。先述した通り、古田氏は幅広い側面を持ち備えただけでなく、それぞれにおいて深い探究活動をしていた。それだけに、その功績を辿る研究は長く果てしない。研究メンバー一同、まずは、その入口を切り開くべく研究に取り組むという責務を担いながら、アーカイブの実現を含めた本プロジェクト活動を進めていきたい。その行く先には、学内外における子ども学を研究するあらゆる場や人へとつながっていくことを目指している。

各人によって語られたインタビュー内容は深く幅広いものとなった。

プロジェクト

寄贈資料の可能性を掘り起こす

2020年2月12日に、古田氏の御令室である古田文恵氏と、絵本『おしいれのぼうけん』の編集者として当時携わられた童心社の酒井京子氏へ、その制作に関わるインタビューを行った。

2020年2月２日に、古田氏の行っていた「古田塾」で深く親交のあった今関信子氏、一色悦子氏、山口節子氏、池田陽一氏を交えて、古田氏に関わる当時の思い出や、『全集　古田足日子どもの本』(童心社）の制作に関わるインタビューを行った。

「絵本ナビ」より

2014年6月に亡くなった
古田　足日（ふるた　たるひ）氏について
1927年愛媛県生まれ。
早稲田大学露文科中退。児童文学作家・評論家。

主な作品
『おしいれのぼうけん』、『ダンプえんちょうやっつけた』（いずれも童心社）、『ロボット・カミイ』（福音館書店）、『モグラ原っぱのなかまたち』（あかね書房）、『新版宿題ひきうけ株式会社』、評論『児童文学の旗』（いずれも理論社）、評論『現代児童文学を問い続けて』（くろしお出版）など多数

児童文学の歴史を繙く

文献調査チーム

児童文学史における古田足日の新たな位置づけに向けて

プロジェクトメンバー
子ども学部　子ども学科　准教授　鬼頭　七美

戦後の児童文学の世界を牽引した児童文学者・児童文学評論家の古田足日氏の蔵書が約33,000冊も白梅学園に寄贈されてから、1年が経過しようとしている。資料の搬入と同時に研究プロジェクトが始動し、インタビューチームと文献チームに分かれての研究に早速取りかかってきた。

その後、インタビューチームは、すぐさま古田氏のご令室およびゆかりの編集者・児童文学作家等へのインタビューを敢行し、貴重な証言を得ることができた。しかし、文献チームも後に続けとばかりに研究を始動しようとした矢先、新型コロナウィルスによる緊急事態宣言により、大学への入構制限がなされ、蔵書の保管場所である旧学生寮へ立ち入ることができなくなってしまった。

その後、インタビューチームに遅れて文献チームも、9月から学外の研究プロジェクト関係者とともに蔵書の山に分け入り、文献精査の作業に入った。古田氏がどのような本に関心を示し、どのように保存していたのか、誰からの献本を受け、どのような人脈の中にいたのか等、書物の一つ一つを文字通り繙き、古田氏の読書行為を追体験するような文献調査を、ゆっくりとではあるが着実に行っている最中である。

研究を確実なものとするためには、作業をスピーディーに進めるわけにはいかない。だが、そのゆっくりとした足取りの中で分かってきたことは、古田氏が早稲田大学に在籍中の学生時代に発表した児童文学評論で鮮烈なデビューを飾って以降、旺盛な知識欲を枯らすことなく、幅広い書物に関心を示し、その書物の一つ一つを大事に保存してきたことだ。児童文学作品の書き手としてだけであるなら、蔵書の傾向にも偏りが生じるかもしれない。しかし、数多くの書評の依頼を受ける古田氏は、対象作品に対する批評意識を研ぎ澄まし、さらには児童文学史を俯瞰する眼差しを確保するべく、晩年に至るまで各種文学賞などで話題となった本や、自身の関心の向いた本、執筆に必要な詳細な文献資料等にわたって入手している。

神奈川近代文学館の北村氏より資料の保存方法のレクチャーを受ける様子。

そして、一冊一冊の本の表紙の見返しには、その本についての新聞等に掲載された書評の切り抜きを丁寧に貼り付け、ときにはその書評に「買ってはる」（当該書を購入して書評の切り抜きを貼る、の意）の文字も見いだされる。献本を受ければ献本の辞が書かれた短冊さえも本に丁寧に貼り付けてある。付箋も多数貼り付けられており、いかなる関心のもとにそれらの付箋が貼られたのかについては、これから読み解いていくところである。

調査がまだ途についたばかりの状態で二度目の緊急事態宣言が出され、再び文献調査は暗礁に乗り上げた形となったが、もとより蔵書数の多さから長期戦の調査となることは織り込み済みである。長くなるであろう調査の先に、古田氏の児童文学史上における新たな位置づけが提言できる日を待ち遠しく思う。

プロジェクト　2020-2021

図書館チーム

古田足日さんの寄贈資料に触れて、本への興味もさらに深まりました。

～図書館アルバイトを経験して～

子ども学部　子ども学科　2021年3月卒業
進路決定先：東京都小学校教諭　髙橋　真奈

コロナの影響でアルバイトがなくなってしまったため、図書館アルバイトに応募しました。一つ目の仕事として、本学へ寄贈された古田足日さんの資料整理作業に携わらせていただきました。古田さんがお描きになった『おしいれのぼうけん』が子どもの頃とても大好きで、資料を整理していく中で、絵本をはじめ、児童書の数がとても多いことに驚きました。児童書の他にも、多くの分野の本があり、線や印、関連する資料が貼られている本も多く、古田さん自身も本からたくさんの情報を得て、執筆活動をされていたのかなと想像することができ、ワクワクしました。

もう一つの仕事として、返却された本の配架を任されました。図書館を利用する人が文献を見つけやすいよう本に1冊1冊分類番号をつけ、その番号順に並べて整理していることを知りました。普段使っていた大学図書館がどのように運営されているかを少しですが学ぶことができて良かったです。図書館職員の働きがあってこそ、活用できていたのだと強く感じました。

在学中の図書館の思い出は、大学2年生の頃空きコマに自習のために頻繁に利用したことです。とにかくいろいろな種類の本に触れることができ、本や講義から得た知識は、今とても役に立っています。私は小説が好きなので、1～2年生の頃は小説を、3～4年生の頃は採用試験対策、授業づくりの本をよく借りていました。卒論の文献も借りました。私は多くの本に触れることができたため、本への興味もさらに深まりました。現在はコロナ禍であるため、難しいこともありますが、皆さんも是非図書館を有効に活用してください。

絵本をはじめ、ふせん・書き込み等のある児童書も多数ある。

学生も一冊一冊確認しながら受入れ作業中。

図書館おすすめスポット

１階　雑誌コーナー
地下　仲本ゼミおすすめ絵本

蔵書検索（OPAC）
も新しくなりました。

■図書館１階雑誌コーナー閲覧机、イスを新たに入れ替えました。

図書館１階にある雑誌コーナー閲覧机２台とイス 12 脚を新たに入れ替えました。閲覧机については、３年前に実施した学生アンケートで要望がありましたので、メイン箇所の１階閲覧机・イス入れ替え、昨年の地下階閲覧机・イス入れ替えに続き、今回第３弾として実施させていただきました。授業や資格のための勉強にぜひ活用してください。

また、地下階閲覧席付近には仲本ゼミ生おすすめ絵本紹介コーナーも設けています。季節ごとにラインナップが変わりますので、こちらも注目してください。今後も館内環境をますます充実させるように努めていきますので、図書館アンケートを行う際はぜひご意見やご要望をお聞かせください。

■図書館スタッフがおすすめする本コーナー（1 階）

図書館スタッフが、在学生のみなさんにぜひ読んでほしい本を取りそろえています。

小説やルポルタージュ、エッセイなどの現代社会に関係するテーマや、日々の勉強に関係するものなど、様々なジャンルが並んでいます。一見、関係ないように思えるタイトルでも実は役に立つこともあります。図書館１階の閲覧席横にありますので、ぜひ手にとって知識・興味関心を深めてみてください。

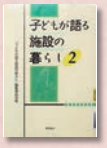
■小学校教科書、学年別絵本、教員養成推薦書コーナー（1 階）

図書館の１階階段横にコーナーがあります。各小学校で採択している国語・算数・理科・社会・道徳等の教科書と、各教科の指導要領が並んでいます。

また、先生方が推薦した小学校教諭になるために読んでおきたい本も隣にあります。貸出（1 週間）もできますので、小学校教諭を目指す方はぜひこのコーナーに足をはこんでください。

図書（絵本）貸出ベスト10

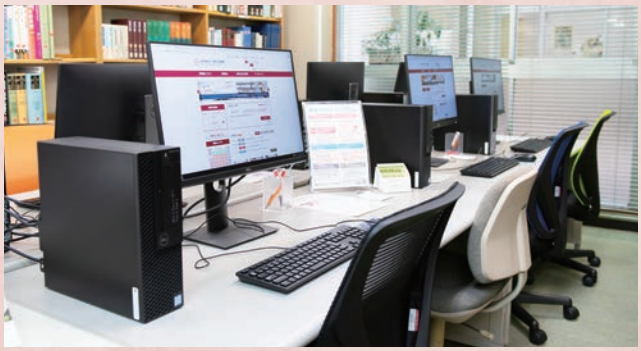
（2020/01/01～2020/12/31）



順位	回数	書名
1 位	19 回	跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること
2 位	15 回	たんぽぽのうたがきこえる
3 位	13 回	子どもが語る施設の暮らし 2
4 位	12 回	施設で育った子どもたちの語り
5 位	10 回	育ちつづける人達 障害の現実と普通の生活のはざまで
5 位	10 回	自閉症の子があなたに知ってほしいこと
7 位	9 回	いいんだよ、そのままで
8 位	8 回	家族と暮らせない子どもたち 児童福祉施設からの再出発
8 位	8 回	子どもの暮らす施設の環境 これからの児童養護のかたち
8 位	8 回	自閉症の人の人間力を育てる
8 位	8 回	施設で育った子どもたちの居場所「日向ぼっこ」と社会的養護

2020 年はコロナ禍で現場実習が学内実習に切り替わり、昨年までのベスト 10 では常連だった絵本が入らず、レポート課題に関する図書がベスト 10 を占める結果となりました。
読みたい本が見当たらなければリクエストも受付しています。

■検索PCが新しくなりました



1F・地下階の検索PC全台 入れ替えを行いました。

■館内の感染症対策紹介　～ご協力をお願いいたします～

入館確認・手指の消毒をお願いしています。

利用者同士が密にならないように案内を設置しています。

花みづき・図書館についてのご意見・ご感想を図書館までお寄せください。E-mail：library@shiraume.ac.jp

図書館のホームページはこちらから　http://libwww.shiraume.ac.jp/